

京都大学薬学部 SGD 演習レポート

第6回 ディベート

授業実施日：2018年5月17日（水）4限・5限

担当教員：高須清誠教授・大野浩章教授・津田真弘講師・三宅歩講師

対象学生：薬学部1回生83名（4クラス編成）

場所：医薬系総合研究棟2階 講義室A・C、薬学部本館22・23

授業の目標

第6回の目標は、ディベートというものがどういうことを理解することです。

授業の場面

1. ディベートの説明（15分）

まず、ディベートとは何かに関して、ディスカッションと比較しながら説明が行われました。本授業では、ディベートは、「ある問題（争点）をめぐって、相反する両面から客観的なデータを基に推論を重ねていき、課題探究や合理的な問題解決・意志決定をするための方法」と定義されました。ディスカッションとの大きな違いとして、自分自身の意見を脇に置いて、客観的に、合理的な解決策を導くことであることが強調されました。その後、ディベートにおけるルールや方法、進行の仕方に関して説明が行われました。

2. 立論・反駁の作成（50分）

3つのテーマ（「京大は立て看板を撤去すべきか？」「コンビニエンスストアは24時間営業すべきか？」「留学に行くならアメリカかヨーロッパか？」）が示され、教員よりグループおよびテーマと立場（賛成か反対か、など）が指示されました。1つの教室あたり学生が20名ずつになるように割り当てられ、その20名がさらに5人ずつ4つのグループに分けられました。



この50分間で、学生はディベートの準備として、パソコンやスマートフォン

を使ってウェブサイトから情報を収集し、論を立てるという作業を行いました。例えば、立て看板のテーマでディベートをするグループは、京都のみならず他国の条例を調べたり、そもそも今回の規制の理由を調べたりしていました。

3. ディベート (31分×2セット)

【ここでは、報告者の見た2つのディベートに関して報告させていただきます。】

2つのグループが向かい合って座り、残り10人の学生が審査員として着席しました。1セット終わると、審査員をしていた学生が今度はディベートを行い、ディベートを終えた学生が審査員となります。



第1セットでは、立て看板の是非というテーマで議論が行われました。憲法における表現の自由の保障、景観条例などといった根拠を使って、自分たちの主張を支持していました。



第2セットでは、留学するならアメリカかヨーロッパかに関してディベートが行われました。こちらでは、世界大学ランキングや世界英語ランキング、授業料などの具体的なデータや、奨学金制度への言及など、さまざまな観点が両チームから提示され、白熱したディベートとなりました。

最後に、ディベートの内容に関して10人の審査員(学生)が採点を行い、それに基づいて自分の支持するチームに投票し、それをもとに勝敗が決定されました。

4. まとめ (10分)

ディベートのポイントが最後に解説されました。特に、本日の授業で学生が弱かった「相手に質問する力」に関して重点的にポイントが説明されました。

印象に残った点

留学するならアメリカかヨーロッパかというテーマ下でのディベートでは、

数値的なデータや法律、文化など多くの観点が提示され、議論が行われていました。一方で、立て看板の是非に関しては、どうしても根拠として使えるものが限られてしまい、学生たちも根拠を探すのに大変苦心していました。このように、ディベートにおいては、テーマ設定によって難易度が大きく変わることを再認識しました。

授業の最後にまとめとしてディベートのポイントに関して解説がありましたが、ディベートの難しさを実感したためか、2コマ続きの授業の終盤であるにも関わらず、真剣に聴いている学生が授業の始めよりも多かったのは印象的でした。授業の始めに比べて、ディベートを「自分のこと」として捉えることができるようになってきているように見受けられました。

記事作成者：高等教育研究開発推進センター研究員 長沼祥太郎

監修：高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代